子育て環境日本一を目指すために

いま子育て中の皆さんに聞いてみました。

私の提言

緊急時医療体制の不安解消を！

◆最近の新聞に、救急搬送時間が県内最下位の塩谷地区が、搬送時間短縮を目指し「塩谷地区救急医療対策会議」を立ち上げ、初会合が矢板消防署で開かれたとありました。

搬送時間短縮にむけ、八月の次回会合で関係機関の改善策を決め、十月から実行し年度末に効果を検証する方針が決められたといいます。

◆以前三歳の孫が急に倒れ、かかりつけの病院で診てもらいました。

帰ってきてから夕食を食べ元気に駆け回っていましたが、急にまたバタンと倒れ、びっくりして救急車をお願いしました。

救急車はすぐにきてくれました。病院で診てもらったばかりだったので、そこに搬送をお願いしましたが、医師がいないと言われ他の病院とのやりとりが始まりましたが、なかなか決まりません。

結局再度かかりつけの病院と交渉し、診察して頂いた医師の付き添いのもと、ほかの病院へ行くことができました。

◆また、これとは別に小一の孫が骨折したときのこと。

夕方のことで、どこの病院に電話しても、専門医がいないからと断られました。消防署に電話をかけ紹介された病院でも断られ、代わりに宇都宮の病院を紹介され、やっと診てもらうことができました。戻ってきた時は午後十時半を過ぎていました。

そんな経験があったので今回の新聞記事を興味深く読みました。

◆なかなか診てもらえないのは確かに塩谷地区の医師不足が大きな原因なのでしょう。しかし、そうした課題があるなかでも知恵と努力で時間短縮や、特に子どもの緊急の医療体制には力を注いでほしいと思います。

◆子どもが急を要する病気やけがをした時、親はパニックになったりオロオロと慌ててしまうと思います。

そういう子育て世代の強い味方として、行政と医療関係がネットワークを強化し、今ならどこの病院で診察が受けられるなど、二十四時間対応で情報を教えてくれる機関、たとえば「子どもＳＯＳ」なるものがあれば、安心して子育てができるのではないでしょうか。

（小学生・幼稚園児の祖母）

東小学校の女子ソフトボールチーム「矢板イースターズ」が、県大会でベスト４に入り、八月十・十一日に山梨県甲府市で行われる関東大会への出場が決まった。久しぶりの好成績に関係者は喜んでいる。

周囲に請われて、孫ほどの年齢の子どもたちを指導する同チームの指導者・宮本憲治さん（64歳）は、市内の他のチームの指導者を児童の保護者が務めている中で異色の存在。シルバーエイジが社会貢献する一つの例といえそうだ。

宮本憲治さん

●まず礼儀

自分の孫のつもりで子どもたちを厳しく指導している。練習の基本は礼儀作法が一番、次がソフトボール。特にきちんとしたあいさつと、言葉に出して意思表示することを大切にしている。

また、学校あってのソフトボール。クラブの指導者として、宿題を忘れないなど、基本的な注意も。

「練習して努力すれば上手くなるということ」「礼儀作法ができれば良い試合ができる」ということを子どもたちに伝えたい。

●親に求めたいこと

さまざまな考え方の親がいるが、練習のプロセスで子どもが成長することが大事。試合の結果や成績だけを見て感情的にならず、自分の子だけでなくチーム全体を応援して欲しい。プロでも三割打てばたいしたもの。エラーしてもいいから積極的にやることが大切。他人のミス、我が子のミスを温かく認めて欲しい。

●人材活用と基金の充実を

矢板には野球やソフトボールのシニアクラブがあり、技術の高い人たちも。そんな人たちを活用する道もあると思う。

また、健康な身体を作る機会を子どもたちに与えるためにスポーツ環境は欠かせない。今回のような大会に出ようとすると多額の経費が必要。特に子育て世代はお金のかかる時期。保護者が支援金を集めて頑張っているが、そんな親たちに負担をかけないような支援があればと思う。レベルアップを図ろうにも経済的な問題がネックになっている団体は多い。小中学校の子どもたちはみんな矢板の子どもたち。子育て環境日本一のためにも、ぜひ、スポーツ振興基金の充実を考えて欲しい。

（Ｍ・Ｏ）

編集後記

かわら版ほとんど通記者がシニア世代。取材して出会った人たちに元気をもらい、老化は絶大。元気が、さらに元気を生み出してくれる元気を生み出してようだ。酷暑のビールを楽しみ元気を維持したい。